様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １９ 日現在

機関番号：３２６１４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ００００４１

研究課題名（和文）アドルノの歴史哲学　－　美学との関係において

研究課題名（英文）Adorno's Philosophy of History

研究代表者
藤野　寛（Fujino, Hiroshi）

國學院大學・文学部・教授

研究者番号：５０２９５４４０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：第一に5年間、ほぼ毎月、合計60回の「美学理論研究会」を5～10人の参加のもとズーム開催した。第二に、申請者が合計5度、ベルリンのベンヤミン･アルヒーフに赴き、アドルノの『美学講義1961/62」『歴史哲学講義1957』を閲読、筆写した。「美学理論研究会」では2006年来、アドルノの哲学的主著『否定弁証法』と『美的理論』を原典購読し議論してきた。並行して『美学講義1958/59』を読み進めてきたが、アドルノ美学理解にとって重要なこの講義を翻訳・刊行しようという企画が生まれ、研究会メンバーの分担協力のもと翻訳作業に取り組んできた。翻訳原稿が出そろい原稿の校正段階に入っている。

研究成果の学術的意義や社会的意義
アドルノの哲学的思考の中心には美学・芸術論がある。けれどもその唯一の体系的著作である『美的理論』は難解を極め、しかも邦訳の質が極めて低いため、日本のアドルノ研究は未だにアドルノ美学の全貌を捉えられずにいる。
申請者が主催する共同研究グル-プ「美学理論研究会」はアドルノのこの美学上の主著を原典で読み議論するというところから出発し、先ず2019年に研究成果を共著『アドルノ美学解読』において公にした。次いで、極めて懇切丁寧に語られたアドルノ『美学講義1959/60』の共同翻訳に着手し、近く刊行される。日本のアドルノ美学の研究は、この両書によって礎石を置かれたと考える。

研究成果の概要（英文）：First, the Principal Investigator organized a Study Group on Aesthetic Theory which were held almost monthly for five years, with 5 to 10 participants. Second, the Principal Investigator visited the Benjamin Archive in Berlin five times to read and write out Adorno's "Lectures on Aesthetics 1961/62" and "Lectures on the Philosophy of History 1957". Since 2006, the "Study Groups on Aesthetic Theory" has been reading and discussing Adorno's philosophical masterpieces "Negative Dialectic" and "Aesthetic Theory" in the original texts. In parallel, we have been reading "Lectures on Aesthetics 1958/59," and a project to translate and publish these lectures, which are important for understanding Adorno's aesthetics, was born, and we have been working on the translation with the cooperation of the Study Group members. The translation has been completed and the manuscript is now in the editing stage.

研究分野：Social Philosophy and Aesthetics

キーワード：アドルノ　歴史哲学　美学　弁証法

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

アドルノをめぐる研究環境は、1969 年の彼の死後 50 年を迎え、大いに変貌し、着実に改善されつつある。特に 1993 年以来、継続的に刊行されている遺稿全集の貢献には歴然たるものがある。就中、18 巻からなる講義録刊行の意義は、講義でのアドルノの語り口が、書かれたテクストとは異なり懇切丁寧でわかりやすこともあって、とても大きい。テーマを美学に限ってみても、既刊の『美学講義（1958/59）』、『クラーニヒシュタイナー講義』、そして刊行が待たれる『美学講義（1961/62）』によって、これまで美学の体系的著作としては難解きわまりない『美的理論』（1970）一冊に頼ることを余儀なくされてきた読者、研究者の視界は大きく広げられた。

アドルノは生前六度フランクフルト大学で「美学」講義を行っているが、1958/59 年講義は、エバーハルト・オルトラント氏による綿密周到な編集のもとに 2009 年に刊行され、現在では既に文庫化もされている。それに対して、1961/62 年講義は、重要性においていささかも引けを取らない充実した内容であるにもかかわらず、未だ刊行日時は定まらず、現時点ではベルリンのベンヤミン・アルヒーフで閲読が可能であるにとどまっている。61/62 年講義の編集・刊行が待たれると同時に、58/59 年講義が邦訳されることの意義には測り知れないものがあるのだった。

アドルノの美学上の体系的著作として、従来、唯一のものと見なされてきた『美的理論』については、実は一冊の著作とは見なされえないという事情がある。アドルノの突然の死に際して残されていたのは、膨大な草稿の束だった。この束から、グレーテル・アドルノとロルフ・ティーデマンによって、一冊の著書が編集されたのである。この編集作業が極めて良心的に遂行されたことに疑念が差し挟まれたことはないが、しかし、それが「編集」である事実は動かない。その事情を背景として、シュテファン・ミュラー=ドームのイニシアティヴのもと、この草稿を可能な限り原状態に忠実な形で復元し、公開・公刊しようとする企画が立ち上げられている。それがどのような形での「公開」になるのか、プロジェクトの全貌についてはなお未確定な部分もあるが、いずれにせよ、『美的理論』という著作について、今後新たな発見がなされていくことは確実であり、この「著作」についてこれまで同様に語ることは不可能になると予想される。

２．研究の目的

そのような状況の変化を背景に、研究代表者は、2014 年に「アドルノ倫理学の研究 ― 美学との関係の中で」という研究課題を立て科研費を申請した。これが認められたことにより、4 年間、アドルノの美学と倫理学を主題とする研究を進めた。その中で徐々に明らかになってきたことの一つに、アドルノの美学思想、芸術理論を理解する上での歴史哲学の重要性がある。

アドルノの歴史哲学という場合、少なくとも二つの観点に着目する必要がある。一つは、ホルクハイマーとの共著『啓蒙の弁証法』の中で提示・展開されている、神話時代から現在に及ぶ文明の歴史の全体理論である。この「大きな物語」の中に、アドルノの芸術理論もしっかり位置づけられるのであって、例えば、芸術とは、自然支配としての啓蒙によって傷つけられた自然に声を与える試みである、とするテーゼはその消息を鮮やかに表現している。けれども、いま一つ、もう少し「小さな物語」にも注意が払われねばならない。それは、ヘーゲルの『美学講義』のおよそ 50 年後に、ボードレール、ヴァーグナー、モネらの試みを通して「芸術のモデルネ」が始まったと捉える物語であり、このモデルネの実験は 1910 年代に一つの頂点に達するところとなったと見なされる。1903 年生まれのアドルノの芸術理解は、このモデルネの運動に深く根ざしている。アドルノの美学思想は、19 世紀中葉から 20 世紀にかけてのヨーロッパの芸術（文学、音楽、美術）史の展開を背景とし、それとの密接な関連の中で練り上げられたものなのだ。

本研究は、アドルノ美学と 19-20 世紀のヨーロッパの芸術史の関係はいかなるものか、という問いに答えることを目的とするものである。この問いは、否定的に言えば、1910 年代以降、アドルノにとっては、芸術の世界においてもはや新たな展開はなかったのではないかとも問われうることを意味する。しかし、現実には、1960 年代に至って、アドルノのこのモダニズム理解に揺さぶりをかける状況が出現し、その新たな動向にアドルノ自身も反応を示した。「芸術と諸芸術」と題された重要なエッセイの中で、アドルノは、一つ一つの芸術ジャンルの自律的展開というモダニズムの理念によっては解釈しきれない新たな動向を複数の芸術ジャンルの「縺れ合い(Verfransung)」と捉え、この動向との対決を試みている。ただし、この新たな動向と本格的に取り組む時間はアドルノには与えられなかった。「ポストモダニズム」と括られることもある 1960 年代以降のこの新たな動向の理解・解釈も含め、アドルノの美学思想・芸術理論をより深く理解するためにも、歴史哲学という枠組みのもとで研究を進めることが不可欠である。

３．研究の方法

本研究は、アドルノ美学と 19-20 世紀のヨーロッパの芸術史の関係はいかなるものかという問いに、『啓蒙の弁証法』において提示された「大きな物語」を見据えつつ歴史哲学的に答えることを目的とする個人研究であるが、それは、研究代表者が続けてきた共同研究に根づくもので

あり、自らも共同研究の人であったアドルノという体系的で学際的な知性に、共同研究を通して迫ろうと試みるものでもあった。過去 40 年、研究代表者が西村誠氏と月に一度のペースで行ってきたアドルノの哲学・美学の著作を原典で読む勉強会が、メンバーを拡大しつつ継続された。そこでは、アドルノの哲学上の主著『否定弁証法』『美的理論』、そして『美学講義（1958/59）』が講読され議論された。研究代表者は、2006 年に前任校の一橋大学言語社会研究科に赴任すると同時に院生諸君からの要請を受けて『美的理論』を原文で読み議論する「美学理論研究会」をスタートさせた。既に 1985 年頃から研究室の先輩であった西村誠氏と『否定弁証法』を読む勉強会を続けていたのだが、2009 年から両研究会は合流し、午前に『否定弁証法』と『美学講義』、午後に『美的理論』を読む研究会を月に一度のペースで行ってきた。今では、参加メンバーは 10 人を超えるこの研究会の特徴は、多彩多様な学問的、および芸術的関心を抱いてアドルノと取り組む複数の参加者によって構成されている点にある。ある者は音楽、ある者は美術、ある者は文学、ある者は哲学（研究代表者はここに属するのだが）といった具合である。こういう多彩な研究関心を持つ者達が集まって行われる研究会は、アドルノという研究対象にふさわしいものでもある。アドルノ自身が、哲学・音楽・文学・社会学といった多様な知的関心に駆られて学問していたのみならず、ある時期から彼は、マックス・ホルクハイマーによって統率され批判的社会理論とも称される共同研究集団の中で、知的トレーニングを受け、また研究を推し進めてもいたからである。彼自身が共同研究の人、批判的対話の人だった。そのアドルノの学問の全体をカヴァーするためには、研究者の側でも個人の力量をもってしては到底太刀打ちできないのであり、共同研究が要請される所以である

第二に、研究代表者が夏期・春期休暇を利用してベルリンに赴き、当地のベンヤミン・アルヒーフに所蔵され一般に公開されてもいるアドルノの講義草稿を閲読し筆写した。「美学講義（1961/62）」は、夏学期・冬学期に週二回のペースで行われ、全体で合計 58 回に及んだもので、遺稿全集の一冊として刊行される予定だが、刊行にはなお数年を要すると予想される。未刊行講義の原稿は、厳しい著作権保護義務のもと、インターネット上にアップされることはなく、ベンヤミン・アルヒーフで読む以外にアクセスの方法はなく、コピーすることも写真を撮ることも許されていない。

第三に、現代ドイツのアドルノ研究者を毎年一人（計四人）日本に招き、講演会および研究会を開催して学問的交流をはかることがめざされた。「フランクフルト学派」と括られることもある哲学研究の潮流は、現在、第三世代の退場、第四世代の精力的な活動の時期を迎えつつあるが、そこではアドルノ哲学は依然として有力な知的インスピレーションの源泉の役割を果たしているのである。講演会および研究会を通して新しいアドルノ研究の動向を学び、また、われわれの共同研究メンバーへの研究上のアドヴァイスを得ることが目的となった。具体的には、既に二度われわれの研究会にお招きしたことのある Eberhard Ortland 氏（ビーレフェルト大学）、2019 年 3 月にお招きした Georg Bertram 氏 （ベルリン自由大学）に加え、新たに、いずれも新進気鋭のアドルノ美学研究者である　Juliane Rebentisch 氏（ダルムシュタット工科大学）、Thomas Khurana 氏（エセックス大学）との交渉を開始したいと考えていた。さらに、歴史哲学研究の大家　Emil Angehrn 氏（バーゼル大学）、アドルノ美学の代表的研究者 Gerhard Schweppenhäuser（ヴュルツブルク大学）氏も招聘候補として考えていた。

４．研究成果

第一に、研究代表者は、この５年間に、夏期および春期休暇を利用してベルリンのベンヤミン・アルヒーフに５度赴き（2019 年 8 月、2021 年 9-10 月、2022 年 8-9 月、2023 年 3 月、2023 年 8‐9 月）、61/62 年冬学期の「美学講義」の 15 回分を閲読、筆写し終え、次いで 1957 年の「歴史哲学」講義の閲読・閲読に取り掛かった。こちらも、計 20 回の講義の内 18 回分を閲読・筆写した。この歴史哲学講義の記録は不完全な形でしか保存されておらず、しかも講義自体が夏学期のみの開講にとどまったため、分量的にも一冊の書物となるには足りず、遺稿全集の中に取り上げられる予定はない。けれども、歴史哲学を主題とする本研究にとって、この講義は、既刊の『「歴史と自由の教説」講義（1964/65）』と並んで重要な情報源となった。なお、「美学講義」と「歴史哲学講義」の内容はいずれも、上記「美学理論研究会」の内部で共有された。

「美学理論研究会」のメンバーの中から、われわれの研究成果をまとめて研究論文集として世に問おう、という声が上がり、共同での取り組みを経て、『アドルノ美学解読 ― 崇高概念から現代音楽・アートまで』（藤野寛・西村誠編著、花伝社、2019 年 12 月）を刊行することができた。藤野・西村二名の監訳者の他に７名の研究会メンバー、合計９名による論考が収められた。現時点では日本には類書のないアドルノ美学研究書となっており、本邦のアドルノ研究に一石を投じることができたと考える。なお、本書の共編者である研究代表者も、第一章「アドルノにおける Asthetik/Ethik」と「まえがき」を寄稿している。

アドルノの美学については、数多くの音楽論を別にすると、体系的著作としては『美的理論』一冊あるのみと言っても必ずしも過言ではない。そして、この『美的理論』が単に晦渋に書かれているという事実に加えて、その邦訳がクオリティの極めて低いものであって、日本の読者層にとって、アドルノ美学への接近はむしろ拒まれているという残念な事情がある。それに対して、

アドルノの講義は、いずれも噛んで含めたように丁寧に語られる親切なもので、『美学講義』もその例にもれない。現在なお刊行中のアドルノ遺稿全集には 1958/59 年のものと、1961/62 年のものと二度の美学講義が収録されるのだが、この二つの美学講義を読むことで、アドルノ美学への接近が一気に促進されるであろうことは疑いを容れない。「美学理論研究会」では、メンバーの内 9 名の協力のもと、この重要な講義の翻訳に取り掛かった。幸い、刊行を引き受けてくださる出版社も見つかり、アドルノ『美学講義 1958/59』（藤野寛・西村誠監訳）として刊行できることになった。翻訳原稿も出揃い、目下、校正段階に入っている（2024 年中には刊行される見込みである）。アドルノ美学の体系的理解にとって、この講義が刊行されることの意義は計り知れないと考える。なお、本書の共編者である研究代表者も、第８講義、第１６講義の翻訳を担当するとともに、「監訳者あとがき」を寄せている。

研究代表者は、会員である社会思想史学会の 2020 年 10 月に開催された第 45 回社会思想史学会大会において、「社会批判はなおも可能か？」をテーマとするシンポジウムの提題発表を行った。「批判の規範的前提と歴史哲学」と題する発表は、ある意味で、その時点での本研究の研究成果を総まとめと呼ぶべき内容となった。研究発表者の「批判的社会理論」研究の一つの総括的研究となった。（この研究は、『社会思想史研究』（Nr.45　2021 年）に収録されている。）

2023 年 1 月に公刊された研究論文集『『啓蒙の弁証法』を読む』（岩波書店）の中で、研究代表者は、「第 I 部 V「反ユダヤ主義の諸要素－同一化としての反ユダヤ主義、その原史」」を担当執筆した。美学を正面から論じるものではないが、これもまたアドルノの歴史哲学の重要な一面を解釈する試みでり、本研究の成果の一部をなすと考える。

雑誌『世界』より、「世界史の試練　ウクライナ戦争」を特集とする号に寄稿を求められ、「「時代の転換」のなかのドイツ」と題する小論を寄せた。（「2023 年３月号に掲載された。）具体的な歴史の出来事について歴史哲学を基に考察する機会となった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 藤野寛	４．巻 942
２．論文標題 自粛と同調圧力 ― コロナ禍において自由について考える	５．発行年 2022年
３．雑誌名 歴史地理教育	６．最初と最後の頁 30-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 ―

１．著者名 藤野寛	４．巻 1384
２．論文標題 漱石と文明開化の弁証法	５．発行年 2022年
３．雑誌名 國學院雑誌	６．最初と最後の頁 1‐20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 ―

１．著者名 藤野寛	４．巻 1387
２．論文標題 『「いき」の構造』は倫理学の書か、美学の書か	５．発行年 2022年
３．雑誌名 國學院雑誌	６．最初と最後の頁 105‐117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 ―

１．著者名 藤野寛	４．巻 967
２．論文標題 「時代の転換」のなかのドイツ	５．発行年 2023年
３．雑誌名 世界	６．最初と最後の頁 104‐110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 ―

1．著者名 藤野寛	4．巻 45
2．論文標題 批判の規範的前提と歴史哲学	5．発行年 2021年
3．雑誌名 社会思想史研究	6．最初と最後の頁 9‐30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 藤野寛	4．巻 150
2．論文標題 アクセル･ホネットの｢友情｣論	5．発行年 2020年
3．雑誌名 季報　唯物論研究	6．最初と最後の頁 68-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 藤野寛	4．巻 1150
2．論文標題 ゲオルク・W・ベルトラム「アドルノの〈美の理論〉と芸術の社会的効力の問題」解題	5．発行年 2020年
3．雑誌名 思想	6．最初と最後の頁 131-133
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 藤野寛
2．発表標題 「教育（学）と承認」
3．学会等名 日本教育制度学会
4．発表年 2021年

１．発表者名 藤野寛
２．発表標題 批判の規範的前提と歴史哲学
３．学会等名 社会思想史学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 藤野寛
２．発表標題 間柄の倫理と社会的自由
３．学会等名 日本倫理学会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計2件

１．著者名 藤野寛	４．発行年 2023年
２．出版社 岩波書店	５．総ページ数 292
３．書名 『啓蒙の弁証法』を読む	

１．著者名 藤野寛	４．発行年 2019年
２．出版社 花伝社	５．総ページ数 252
３．書名 アドルノ美学解読－崇高概念から現代音楽･アートまで	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関